

「グラン・キュヴェでございます。」

フルートグラスに注がれた琥珀色の液体は、かすかに赤味を帯びていた。細かい気泡が星雲のように渦巻くと、きらきらと輝いた。

「乾杯、あなた様の健康を祝して。」

「ありがとう。あなたもね。」

強かった昼間の風のせいだろうか、窓の外は雲一つ無く、白い月が煌々と照っている。眼下には夜景が、遠く東京湾の水平線まで広がっていた。

ペンダントライトのやわらかな光の中で、初老の二人連れがゆつくりとグラスを傾けていた。歳を取るならこのようにありたいと思わせるようなカップルであった。

紳士は、黒のタキシードをさりげなく着こなしている。短めの銀髪に、クロスオーバータイにあしらわれたダイヤモンドがよく映えていた。彫りの深い精悍な顔つきは、ほんの少し日焼けして見える。

「このところずいぶん、忙しくしてらしたみたいね。」

「はい……。なかなか引退させてもらえませんがね。ちょっと大きな仕事になるとすぐお呼び出しがかかるんですよ。中南米が済んだと思ったら、次はインドでした。まったくよく使ってください。」

アミユゼは、プチトマトのブルスケッタ。バジルでマリネされた小海老が添えてあった。

婦人はフォークを使わず、直接指で口もとに運んだ。視線が合うと悪戯見つけられた子供のようになり、一瞬肩をすくめて微笑んだ。

優雅な線を描いた眉。さすがに小皺は隠せないものの、強めのマスカラはけしていやみではなかった。古風な真紅のルーージュが、はっきりした輪郭をあらわし、唇に官能的な雰囲気添えていた。口を開けると、ちらりと赤い舌先がのぞいた。

「日本で、もう仕事はなさらないの。」

「ええ、実は、それで戻って来たんですが……。あなた様の方は、最近いかがで

すかな。」

「私は、もうだめよ。なかなか仕事をやる気になれなくって……。アフリカ、中近東なんて、自分から手をつけるところじゃないでしょう。」

ナプキンで口をぬぐうと、大きなエメラルドの指輪が光った。ロングドレスの色は、紳士とあわせたように黒で、その上に黒のレースで編んだケープをまとっている。シャンパンのおかげでやや上気したように見えるが、婦人の肌の白さは実に際立っていた。

豊かな黒髪は、首の後ろで銀の髪飾りに束ねられ、腰のあたりにまで届いている。小柄で華奢な身体に対し、その髪の圧倒的な量感、あたかも独立したひとつの生き物のようである。こめかみから、らせん状にカールした毛が両の頬にかかり、二匹の細い蛇を思わせた。

「フオアグラのソテーでございます。」

真っ赤なフランボワーズのソースの上に、繊細に焼かれたフオアグラがのっている。うまくきつね色に火の通ったフオアグラは、表面だけがカリカリと香ば

しく焼きあがり、内側は生で溶けるように柔らかい。シエフの芸術的な手腕が偲ばれ、二人は満足の微笑を浮かべると互いにうなづき合った。

わずかに残ったガチョウの臭みを、フランボワーズの香りが見事に打ち消してくれる。シャンパンのほのかな甘味がその後を受けて、絶妙なハーモニーとなつて舌の上に広がった。二人は至福の時に身を任せている。

「最近、ペルセに会った？」

「いいえ。あの方も忙しくてね。かなり追い詰められているようでした。」

「まだヨーロッパにいるの？」

「そのようです。最近はおつぱらイギリスやフランスで、牛や羊の相手ばかりしているそうです。あの方にいわせると、何か新しいやり方に結びつくのだそうですが、今のところたいした効果は出ていないようです。」

「ペルセも、昔のことが忘れられないのね。」

「そうらしいですね。でも、あれはいい、いつの話ですか。もう六百年は経っているでしょう。」

「本当に、ペルセラしいわ。今ごろになつてネズミを羊に換えてみるなんて。」

二人の目は思い出を追つて、遙か遠くを眺めていた。

「しかし、あの方がアフリカでなさつた事は、正当に評価されてしかるべきです。あれは実に画期的な方法でした。まさに十四世紀ヨーロッパの再現、いや、まだ解決できないことを考えると、それ以上の成果です。」

「でも、あのやり方は、あまり好きになれないわ。免疫を破壊するという発想はユニークだけど、即効性がないもの。」

「おやおや、あなたまで昔に戻つたみたいだ。即効性という事でしたら、私だつてあなたにはかないませんよ。」

コート・ダニユー。か細い肋骨の上部にわずかな肉がついている。生まれて間もない子羊の背肉は、ほのかに乳の香りがした。よほど新鮮なのであろう、シエフは定番のハーブを使わずに、岩塩をすり込んだだけでロゼに仕上げていた。うっすらと染み出した血が、さらに滋味を加えている。二人は夢中で

細い骨をしゃぶっていた。

「ここまで美味しい羊に出会うのは、本当に久しぶりよ。」

「そうですね。一昔前なら頼まなくても手に入ったものが、このところいやに難しい。特に心臓や脳味噌は、よほど手を尽くさないと出て来ませんね。」

「なんとといっても羊は新鮮じゃないとだめね。目の前で屠った物の味を知ったら、他ではもう食べられなくなるわ。」

「子羊一頭で悪魔に魂でも売りますか。」

「悪魔が魂を売るかでしょう。もし、悪魔に魂があればだけれど。」

二人は、この冗談がよほど気に入ったらしく、涙を浮かべて、ひとしきり笑った。

赤ワインは野趣に富んだグラブの物だった。フルボデイでありながら、どこか軽い。成熟は十分で、香りも開きかけてはいるが、まだ臆病である。シャトーの土地に含まれた鉄分のせいで、かすかながら血のような味わいを残し

た。しかし、シンプルな肉の味と香りを最大限に活用した今日の料理には、奇跡ともいえるマッチングを示した。

「1992年ね。私が最後に仕事をした年だわ。」

「覚えておりますとも。クウェートとイラクでしたね。」

「でも、あまり成功とはいえなかったわ。おかげですっかり自信をなくして、ユーゴは誰かに任せてしまったもの。」

「やはり、1945年ですな。」

「そう、忘れられない。あの年が、私の最高の年だったわ。」

二人が窓の外を眺めると、瞳の中に、業火に包まれた東京の町が映った。無数の火の手が上がり天空を焦がしている。紅蓮の炎、熱。頬にあの時の熱さが蘇ってきた。サーチライトが追う中、無数の爆撃機の影に混じって宙を舞う自分の姿を婦人は思い出していた。視界一杯に広がる東京の町は、人々の魂を溶かす巨大な溶鉱炉だった。溶ける。鉄も石も人も何もかも。その日、B-29の無線士は、狂喜する女の笑い声を聞いたという。忘れていたあの快感が背筋を駆けのぼった。

「実に…あの年はたいしたご活躍でした。日本中、いや世界中で、われらを呪い、泣き叫ぶ声が聞こえましたな…。」

「ヒロシマ、ナガサキ…。」

二人の目にはうつすらと涙さえ浮かんでいた。

「ウプスッ。少しワインが過ぎたようです。」

だれも気づかなかったその瞬間に、紳士の耳は黒々と毛が生え、頭のうえまでシユツと伸びると、また元に戻った。

「フフフ…。」

婦人が笑ってテーブルの上の花瓶に目をやると、一輪挿しのバラが見る間にうなだれて、はらはらと散った。

「今度のお仕事は、東京？」

「はい。阪神だけですと、どうも片手落ちのような気がして…。」

「わたしも、せつかくだから、北朝鮮にでも行って見ようかな。」

デザートを断り、二人はマール・ドウ・シャンパーニュで二度目の乾杯をし



た。

皇居の方角を見ると、月は地上近くまで降り、倍の大きさとなって赤く鼓動していた。やがて黒雲が巻き起こり、全ての視界を遮るように広がっていった。